

事例紹介 3. インド・チリカ湖湿地保全

— 中村玲子 (ラムサールセンター事務局長) —

○司会 続いて、インド・チリカ湖湿地保全の事例から、ラムサールセンター事務局長の中村玲子様よりお願いいたします。

○中村 (ラムサールセンター) 皆様こんにちは。ラムサールセンターの中村玲子です。

実はチリカ湖のお話を15分でするというのはちょっと不可能に近い。いろいろな可能性を持った事例ですが、今日は環境コミュニケーションというテーマをいただきましたので、特にその可能性の中でチリカ湖とCEPA——これはラムサール条約が今使っている言葉ですけれども、Communication, Education and Public Awarenessについてお話をしたいと思います。

チリカ湖というのは、インド・オリッサ州のベンガル湾沿いにあるインド最大の汽水湖で、面積が平均して琵琶湖の大体2倍、水深は大変浅いお皿のような湖です(注:30ページからのパワーポイント発表資料参照)。1981年にラムサール条約の登録地になりました。真ん中にあるナラバン島というところに大体200万羽ぐらいの渡り鳥が集結する。ラムサール条約に登録されましたが、これからご紹介するいろんな問題の結果、生態系が変化して、1993年にラムサール条約の登録湿地のブラックリストであるモンルーレコードというのに登録されてしまった湖です。周辺に大体12万人ぐらいの、主に漁民の人たちが暮らしていて、水鳥以外にイラワジカワイルカというカワイルカが50~60頭いるという生物多様性上も大変重要なところ。国際的には水鳥の生息地として有名ですが、古いヒンズー教の寺院などもありまして、地元地域からの観光客も比較的多い湖です。

洋梨のような形をしています。川は五十何本流れ込んでいる。この上から流れてくる川が多くて湖の中に入っています。ラグーンですから、海とつながりがあって、1日に2回、満ち潮と引潮で海の水と湖内の水で行き来があるはず。しかし、上流部の農地開発ですとか森林伐採などで土砂の流入が進んで、これはラグーンの宿命ですが、だんだんに砂洲が延びていって、かつては3カ所にあった海への湖口が、つい最近10年ぐらい前から、湖口がここ1カ所になってしまって、海水と湖水の行き来がほとんどなくなった。それが原因でホテアオイを中心とする淡水性の水草が湖面を覆って、新しい魚が供給されないということもありまして、漁獲高が大変下がった。そういう状況の中でも、インドもこの辺も人口増加があって漁民も増えて漁業圧も増えたということですか、高く売れるエビをつくるためのエビの養殖場が湖内を占拠したとか、さまざまな問題が起こりました。1980年代半ばからの10年間で漁獲高は10分の1になったということがある。それで、この地域の住民たちの生活は本当に困窮したわけです。

それに対してインド・オリッサ州政府が、チリカ湖の生物多様性を回復するため、生態系を回復するこ

とを目的とするチリカ開発公社（CDA）を設立しまして、さまざまな施策を複合的に行いました。環境モニタリングはもちろんですけれども、エビの養殖場の禁止とか、上流部での植林ですとか、住民への環境アウェアネスとか、それ以外に道路網を整備したり、いろいろな施策を複合的に行って、10年ぐらいたってようやく功を奏しました。その中で一番劇的な施策が、あそこにありますように、海の水と行き来するための新しい湖口を開削したことです。これは2000年の初めから工事が始まって、2000年の9月に湖口が開きました。ちょうど写真があるところは湖口が開くときです。湖の生態系が劇的な回復を遂げました。塩分濃度が向上したのでホテイアオイは枯死しましたし、水揚げも回復しました。違法漁業を禁止した効果がだんだん上がってきて、この1年間で1戸当たりの収入が倍増した。生態系が見事に回復したということで、ラムサール条約のモンルーレコードからも削除されましたし、住民参加のもとで湖の生態系を回復するすばらしい成功だったということで、昨年11月のラムサール条約第8回締約国会議でラムサール湿地賞をもらいました。

これが水揚げの回復で、上がカニの水揚量で下が魚全体です。この2年間、湖口を回復してから大変劇的に湖の漁獲が回復しました。

このCDAの事業がなぜ成功したのかということをお私がお考えるのは、これだけの劇的な変化、ある意味では大変きつい施策をしたにもかかわらず、住民たちがそれを受け入れたということは大変大きかったと思います。それにはさまざまな要因があります。とにかく湖のステークホルダーに対する積極的なアウェアネスを大変公平、誠実な態度で、大変な量の情報公開・供給等を共用して進めた。それをやる傍ら、海岸の専門家を招いてモニタリングを進めるとか、常にラムサール事務局に働きかけるとかという、国際的な投入とか交流についても労を惜しませんでした。さらに、CDAという政府機関が地元のNGOとかコミュニティ・ベース・オーガニゼーションとのパートナーシップを大変大事にしたということがキーだったと思います。

特にその中で重要な役割を担ったのがWISA（国際湿地保全連合南アジア）。WIは世界最大の湿地国際NGOですけれども、ここが湿地インプリメンテーション・センターを建設したりとか、環境モニタリングのことで大変大きな協力をしました。

それから、地元バリシュリというNGOがあります。ここを通じてステークホルダーへの本当に積極的な環境アウェアネスをしました。このプログラムは、地球環境基金が3年間助成をして、ステークホルダーへのアウェアネスを行いました。

その中間で役割を果たしたのがラムサールセンターです。ラムサールセンターは1997年以降、折に触れてチリカの方たちと交流をして、ワークショップへの参加などをいたしました。チリカの方たちを日本に呼んで、日本の湿地センターの研修を行ったり、あるいは、日本のラグーンを訪問しました。湖が浅くな

って湖口が閉まってしまい、人工的に湖口を開いて成功したという同じような歴史を持ったラグーンが日本にもあります。サロマ湖です。今、多分日本で一番豊かなラグーンだと思います。サロマ湖の地域の方との交流の橋渡しをしたり、世界湿地の日ですとか、ラムサールセンターがやるさまざまな湿地アウェアネスをパリシュリと一緒にやったり、それからラムサールセンターのネットワークの国際専門家を積極的にチリカ湖に送り込むということもいたしました。滋賀大学の人だとかを送ったこともあります。パリシュリ、あるいはチリカの人たちを積極的にラムサールセンターが開催する国際会議へ参加してもらうということもいたしましたし、メディアとかJICAなどへの情報提供もやってまいりました。

アウェアネスで一番大きな役割を担ったパリシュリが地球環境基金で何をしたかということのご説明です。地球環境基金で地域に132ある村のうち南と北の20村をモデル地域に選定して、徹底的なPRA (Participatory Rural Appraisal: 参加型迅速調査) を行いました。それから、トレーナーたちにトレーニングのワークショップを行って、学校の先生たちと一緒に、どういう環境教育プログラムが必要か、どういうツールが必要かということ徹底的に話し合っただけでプログラムを決めました。国際専門家を呼んできたワークショップで地域との交流をいたしましたし、そのことをもとにして物すごく豊富な量の地域語によるアウェアネスのツールとかプログラムを複合的に展開しました。その傍ら、世界湿地の日にポータルリーをしたり、国際的なプログラムへの参加も積極的に行いました。この中で特に私が重要だと思ったのは、そういうことを担う地域のセンターとして湿地アウェアネス教育センター (CEAE) を4つの村に1つずつ設立したことです。設立して今3年目です。南に5つ、北の20村に対して5つ、このCEAEが活動しています。それ以外に車を使った移動教育ですとか、フローティングCEAEと彼らは言っていました。船を1つ用意して、どこに行ってもすぐ環境アウェアネスプログラムができるような体制と人材をつくりました。

簡単に写真でご説明します。PRAをする人たちのトレーニングの風景と、下はPRAの実施の写真で、自分たちの環境はどうなっているかというような成果物が、もう何十枚も住民たちによってつくられました。

左下は、先生方がどういう環境教育プログラムが必要かということ相談している風景です。右側の写真は車のストリートプレイです。パリシュリの車を置いて、そこでばっと臨時のステージをつくって、この上でストリートプレイをして環境アウェアネスプログラムをしているところです。左側はウォールペインティング。地球環境基金を使って、今大体80カ所ぐらい、住民たちのデザインした「SAVE CHILD IKA」のポスターが村じゅうに散らばっているような状況が生まれています。

これは豊富な印刷物の1つ。本当の一例ですけれども、昔の伝説を集めてオリア語にしたり、「チリカのかがみ」という新聞を毎年4回ずつ出していたり、チリカ湖全体の生態系を紹介する本ですとか、チリ

カの魚、鳥、植物の本、それからビデオをつくったり、これ以外に歌や詩とかいろんなものをつくって、ものすごくたくさん配布しました。

右側はラムサールセンターの国際ネットワークの人たちを向こうに派遣したときに実施した国際専門家ワークショップの風景です。上は地元住民たちとの交流会で、下は専門家のワークショップです。左側は昨年の12月に滋賀大学教育学部の遠藤修一先生に行っていた時のものです。滋賀大学が琵琶湖を使って子供たちにアウェアネスをしている、水質を自分たちでモニタリングしたりする、その手法をチリカに持って行って、安い機材で簡単にしてくれるものを使ってどうやって水質を自分たちで調べるかというふうなことのトレーニングのときの風景です。

これは「世界湿地の日」にあちらこちらで行われているイベントの風景です。賞品のつけたエッセーコンテストとかポスターコンクールですとか、あるいは環境にかかわる歌や踊りのコンテストをして、インセンティブを与える。今年は確か10カ所ぐらいで並行して、2月の最初の10日間ぐらいの間に行われました。下の2つは、右が住民の人たちがボートラリーで「SAVE CHILIKA」の旗を掲げてデモンストレーションをしている、左側は小さな中州の周りを子供たちが「SAVE CHILIKA」のことをキャンペーンしながらデモンストレーション・ラリーをしているところの風景です。

これが先ほど言ったCEAEです。小学校の1室を使っている場合もあります。これはコミュニティーの人たちが自分たちもお金を出して新しい建物を建てました。右側は、モデレーターたちのトレーニングの風景です。モデレーターは全部地域の女性です。右下の写真は、中に子供たちが拾ってきたいろんなものを掲示して、小さな図書館のような形にして使っています。左側の写真は、そこで今年の2月の「アジア湿地ウィーク」に参加した子供たちの記念写真です。

なぜチリカ方式がうまくいったのか。とにかくすべての基礎をステークホルダーの人たちの意志と主体的参加を確保するという中心を置きました。本当に繰り返し繰り返し現地に足を運んで説明をして話し合いをするということで、一切労力を惜しまなかったということがあります。先ほど申し上げたように、大変な量の多様で豊富な情報を地元の言語で提供した。それと同時に、地元の方たちから得た情報を印刷物にして他の人に提供する、あるいはそれを英語にしてインド全体、あるいは国際的に彼らの情報を発信する役割ということに関しても積極的に行いました。1日に1回か2回の食事をするのもままならないような状態にある人たちにも応分の負担をしてもらった。例えばCEAEを建てるときにお金を出してもらったり、労力を提供したりということに関しては、彼らのきちんとした参加を確保しながらやった。それから、CDAという政府組織とパリシュリとのすみ分けとか連携、あるいはパリシュリと地元の草根NGOとのすみ分けや連携を大変バランスよくやってきたということがあります。そういうことを大変透明な公開性に満ちた態度で行ったので、地元の住民との本当に基本的な信頼の醸成ができたと思います。

実はこれらを可能にしたのは地球環境基金であったと私は思っています。

ただし、相変わらず課題は残されています。地球環境基金は3年計画事業で、実は今年度で済みです。でき上がったC E A Eの持続はチリカ開発公社が今後引き継ぐことが決まりました。しかし、132村のうち40村でしかこの活動は行われなくて、どういうふうに横に広がっていくか、あるいは中身をどういうふうにステップアップしていくかということがあります。生物多様性のアウェアネスというのは大変狭いジャンルで、もっといろいろニーズ等があるのをどういうふうにしていくかということもあります。チリカ湖という重要な自然資源そのものを、これからもみんなが漁業を続けていったら、それが枯渇するのは目に見えているので、それをどうしていくか。あるいはイラワジカワイルカとか水鳥の生物多様性をどう維持するか。今、結構ビックネームになっていますけれども、観光客がそこに殺到したときに、本当のいいエコツーリズムが開発できるかどうかという課題があると思います。

ラムサールセンターは、この7年間のかかわりを通じて何を学んだか。やはりステークホルダーの参加ということは大変重要であるということ、その成果を目の当たりにしたということと、現地で何かをするときにはカウンターパートの役割、その性格、性質は本当に重要であるということ、それから日本の資金が全部で1300万円ぐらいだったのですが、的確に移転されたときにどれほど大きな効果が上がるかということも勉強しました。さらに、地域に根ざした活動をしながら、どこかで常に国際的な、あるいは地球的な視野を持ち続けるということが効果を大きくすることも知りました。とはいっても、パリシュリはちっとも珍しいことをしたわけではありません。「王道はない」というのは、実は王道を行ったわけで、秘策はないと言った方がいいと思います。そういう意味で、きちんとしたことをきちんとすれば、ちゃんとしたアウェアネスは行われるということを私たちは学びました。翻って、日本で何か環境問題が起こったときに、こちらから何度も足を運ぶようなこれほど丁寧なC E P Aは行われたことがあるのだろうか、今私たちは実施しているかというようなことを深く学びました。

どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

事例発表3 「インド・チリカ湖湿地保全」
 (中村玲子/ラムサールセンター(湿地と人間研究会)事務局長)



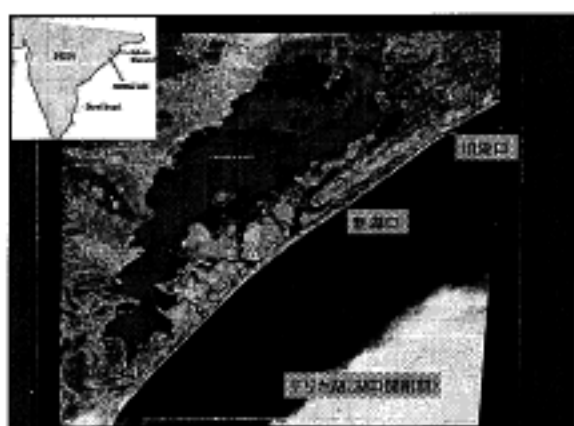
インド・チリカ湖とCEPA
 (Communication, Education and Public Awareness)



ラムサールセンター 中村玲子

チリカ湖とは

- ・ インド・オリッサ州、ベンガル湾沿いの湖沼(汽水湖)
- ・ 面積: 流域355,000ha, 水域110,000ha
 (面積の約1/5が インド最大)
- ・ 水深: 0.5~3.5m
- ・ ラムサール湿地ナラバン島(1981年登録)
 (1993~2002年、モントルーレコードに掲載)
- ・ 漁民: 10~12万人
- ・ 生物多様性: 野鳥160種200万羽
 イワウジカワイルカ 50~60頭
 薬草植物700種
- ・ 文化的宗教的価値: カリジャイ寺院など
- ・ 観光地としての価値


●問題点

- ・ 上流部の環境改変による土砂流入・堆積
- ・ 海への開口部(湖口)の狭小化
- ・ 塩分濃度の低下(湖水の淡水化)
- ・ 生物層の変化: 淡水性植物の繁茂/魚種の単純化、個体数の減少/野鳥の減少
- ・ 人口増加、エンジン付きボートの普及による漁業漁獲
- ・ 湖内におけるエビ養殖場の増加

↓
 漁獲量の急激な減少(10年間で10分の1)
 ↓
 住民の困窮

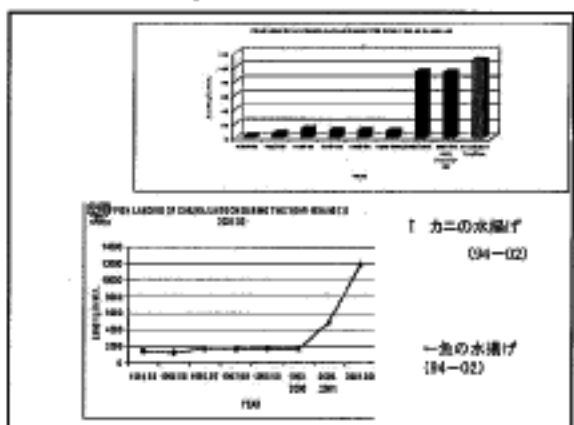
●対策

- ・ オリッサ州政府チリカ開発公社CDA設立(91年)
- ・ CDAの主な仕事:
 シルト沈降、新湖口開削、流域管理、ナラバン島改善、
 水草コントロール、環境教育、
 社会開発、フェリー就航、
 道路網整備、違法漁業管理、
 生物調査、モニタリングなど



●結果=劇的な変化
 塩分濃度向上、水草枯死、水揚げ回復、違法漁業の減少、
 森林回復、1戸当たりの収入倍増、モントルーレコードからの
 削除、ラムサール湿地賞受賞、観光客の増加。

●最大の成果=住民が変化を受け入れた



●なぜCDAの事業は成功したのか
(なぜ、住民に受け入れられたか)

- ステークホルダーへの積極的アウェアネス
- ステークホルダーの管理と利用への参加の確保
- 情報公開・供給・共有
- 公平・誠実な対応
- 国際的インプット
- 地球的視野
- NGO、CBOとのパートナーシップ
(核: WI-SA、RCJ、Pallishree)

●WI-SA(国際湿地保全連合南アジア)との連携

- 事務局がデリーにある国際NGO
- 「チリカ湖のエコツーリズム開発」事業(地球環境基金助成 96~98年)
エコツーリズム開発のガイドライン作成
- 国際ワークショップ「チリカ湖の持続可能な開発」(98年12月)
- 湿地センター建設、環境モニタリング

●Pallishree(美しい村)との連携

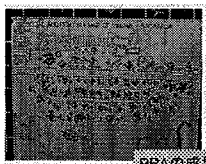
- オリッサ州州都ブバネスワルに本部、ローカルNGO
- 「インド・チリカ湖のステークホルダーを対象にした湿地生態系の賢明な利用のための環境アウェアネス」(地球環境基金助成 00~02年)
(テクニカルサポート: RCJ、CDA、WI-SA)
- サイクロン被害者救済事業(CDAから委託)
- CBOとのネットワーク、コーディネーション

●ラムサールセンターとの連携

- 97年以降、ワークショップ等への積極的関与
- 日本での湿地センター研修へ招待(99年)
- 北海道サロマ湖とのラグーン湿地交流(99年~)
- 地球環境基金とパリシュリの橋渡し、テクニカルサポート
(2000年~)
- アウェアネス活動における協働(世界湿地の日、出版物ほか)
- 国際エキスパートのチリカ湖への派遣
(マレーシア科学大学、WI中国、WI日本、滋賀大学、バングラデシュポーシユなど)
- 海外での国際会議への参加機会の提供
(INTECOL WETLANDS、アジア湿地シンポジウム2001、世界湖沼会議など)
- メディア、JICAなどへの情報提供

●パリシュリのしたこと

- モデル地域選定(南部20村、北部20村)
- Participatory Rural Appraisal (PRA)
- Training for Trainers(TOT)
- 先生たちのワークショップ
- 国際専門家コンサルテーション
- 広報媒体・教材・手法開発
(ポスター、リーフレット、テキストブック、環境新聞、図鑑、旗、ステッカー、ウォールペインティング、チリカソング、チリカビデオ、ストリートプレイ、詩、絵、エッセイコンテンツ、環境市民コンテスト、ポートラリー、ネイチャーキャンプetc.)
- ネイチャートレール
- 世界湿地の日、アジア湿地週間アウェアネスキャンペーン
- 環境アウェアネス教育センター(CEAE)/移動CEAE(車、舟)



PRAの成果物



PRAのための研修



Workshop of Teacher



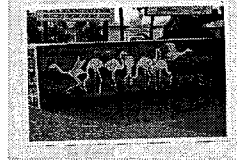
PRAの実地



ウォールペインティング



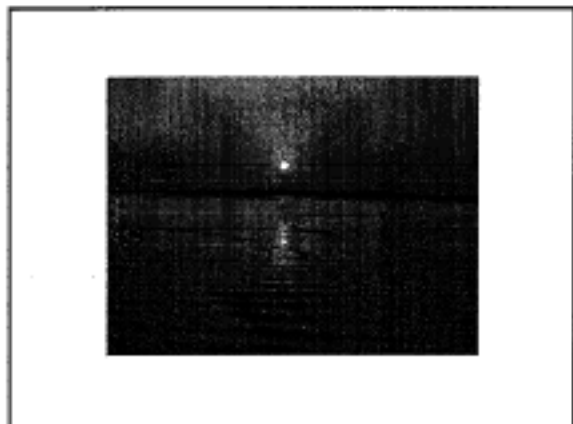
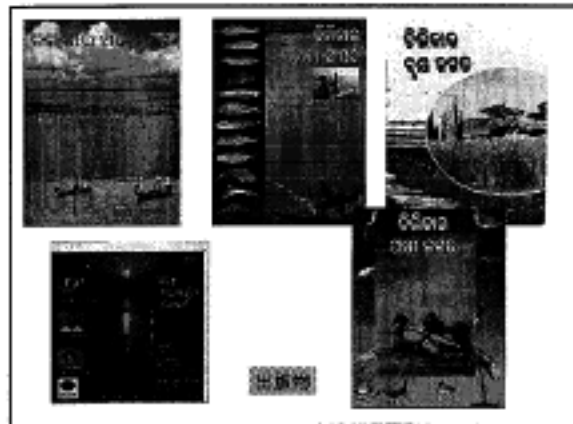
車上ストリートプレイ



ウォールペインティング



車上ストリートプレイ



●チリカ方式はなぜうまくいったのか

- すべての基礎=ステークホルダーの意志・主体的参加
 - 足、汗を惜しまない
 - 繰り返し
 - 迅速で豊富な情報の供給(ローカル語)
 - 情報の発信者としての位置付け(ローカル語→英語)
 - 応分の負担
 - 任せられることは任せる
 - GO、NGOとの連携(協働とすみわけのバランス)
 - グラスルーツNGO、CBOとの連携(協働とすみわけ)
 - 透明性、公開性
 - 信頼の醸成
- これらを可能にする資金的裏づけがあった
(地球環境基金の意義)

●残された課題

- 地球環境基金が終了(2002年度)
CEAEIはCDAが継続
新たな広がり課題(132村中40村)
地域の多彩かつ緊急なニーズにどうこたえる
CEPAのステップアップ
- 資源(チリカ湖)の持続可能な利用
漁業圧の軽減、付加価値、オルターナティブの創造
- 生物多様性の保全
イラワジイルカ、水鳥
- エコツーリズム
大きな可能性(国内・国外とも)
観光客の急増による弊害、地域格差

ラムサールセンターは何を学んだか

- ステークホルダーの「参加」のほんとうの意味と意義、成果
- すぐれたカウンターパートナーの重要性
- 日本の資金を移転する意義とその効果的使い方
- 国際的、地球的視点の重要性
- CEPAに王道はない
- 日本で、これほどのていねいなCEPAは行われたことがあるか、行われているか



ありがとうございます